

風 狂

第68号

風 狂 の 会



【詩】

民草	さとう のりお
鴉の災難	なべくら ますみ
見えない敵	高村 昌憲
風	神宮 清志
BGM ――ある中国映画を観ながら――	原 詩夏至
白鷺	出雲 筑三
お悔み	高 裕香
花宵図	長尾 雅樹

【風狂ギャラリー】

三浦逸雄の世界（五十二）	三浦 逸雄
--------------	-------

【エッセイ】

名勝負の当事者たち	神宮 清志
昭和は遠くなりにはけり？（11）	高島 りみこ

【童話】

パンケとペンケ（10）	宿谷 志郎
-------------	-------

【翻訳】

アラン『芸術論集』（七）	高村 昌憲 訳
--------------	---------

執筆者のプロフィール（五十音順）

赤い吹雪の中を逃げまどう女
突然背負っていた赤子が聞いた事のない叫び声を上げた
動転した母親は背から子を降ろして顔を見る
白眼を剥いて口を開いている赤子
口の中は真赤だった
血ではない
火の粉だ！
母親は気が狂ったように子の口の中に指を突っ込んで火の粉を掻き出し続ける

330の世界最強の爆撃機
33万発の焼夷弾
1発のそれから19の子爆弾
その子爆弾が上下に2段に分散
その1つ1つにガソリンが満杯
そしてそれが途切れなく150分
10万人が焼き殺された
糞軍人共は焼け野原を見てもこうほざいた
大丈夫、日本人はこの前の関東大震災の時だって立派に復興したじゃないか
日本人は踏み潰されても必ず立ち上げる雑草なのだ、と

しかし軍上層部は知っていた
ドイツのドレスデンも同じ方法で焼け野原になった事を
そしてやがて日本もやられるだろうという事も
逃げるな！火を消せ！
こんな訓練を日常的に強制していたのだ
タミクサ
民草が逃げまどっている間
あいつらはとっくに安全圏の中で酒を飲んでいたのでろう

その後はどうなったかって？
あいつらのいうとうりになっただけさ

強風に煽られ 思うように飛べなくなったから
灰色の空の中に立つ
細い鉄柱に止まろうとした
けれど 羽がちぎれるほどに煽られ
体ごと持っていかれそうになってしまった

煽られて拳がった息を
なだめたかったので
近くにあったアンテナに
しがみ付こうと脚を伸ばした

又も吹いてきた風に持って行かれまいと
踏ん張って立とうとした
声を挙げたいのに
それさえもできない

抗いようもなく
諦めたのか
カラスはよろよると
風に追い払われていった

現実には在るとしても見えないから怖いのだ
来るぞ来るぞと言っている時の方が実際に
来た時よりも怖く感じて仕舞うものなのだ
それが初めて経験するものなら恐怖は倍に

新型コロナウイルスの恐怖も初めてなので
想像上の化物を見たように錯覚して仕舞う
恰も隣人に感染者がいるかも知れないので
全ての人間も事物も疑いの目で見て仕舞う

既に正気を失った社会現象になっているが
恐怖心が蔓延してくると独裁が蔓延るのだ
軽い症状だけで分からないかも知れないが
検査体制を整備して敵を正確に見ることだ

恐怖のために学校だけを休校にした儘では
会社も工場もやがては休業になるのだろう
日用品もそのうち不足状態になるようでは
思い切った決断は正解ではなくなるだろう

殆どの子供が未だ感染していないのだから
速やかに授業を再開して正気になるべきだ
インフルエンザ同様に学級閉鎖の段階から
先ず見えない敵を封じる戦略を選ぶべきだ

そこにはいつも風が吹いていた
そこに吹く風はいつも匂っていた
その風には音があった
風には色さえあった

あの風はそこにだけ吹いていた
風にある香りはどこから来たのか
風は遠い昔へ飛んでいった
風は幼い日に運んでいった

そこに行けば風が吹いていた
あの風にあいたい
あの風の中にいつまでも居たい
あの風を掌でつかみたい

そうか

BGMがないんだ

この映画

道理で妙に静かだと思った

荒野に一本

どーんと通っている埃道を

女が歩いている

笑わず

化粧もせず

手を

嫌な男の返り血で真っ赤に染め

途方に暮れ――

それでも

BGMがないんだ

この映画。

仕方がないので

俺も女と歩く

吹きっさらしの

風の音しかない埃道を

情味もなく

かーんと晴れ渡るばかりの空の下を

血に汚れ

黙って

渇きに耐え――

それでも

それが

この甘くねばつく世界を

俺自身を

大地の上に

手荒く解き放つ

寡黙な

屈強ながらんどうであることを
心のどん底で
どうしようもなく
訥々と
説得されながら。

ほっそりと柳にも似て水辺に鳥あり
そろりとうごく彫刻は
青空を背にした一幅の絵

わびた紫竹にも似た脚
若鮎は松と勘違いして戯れたとき
華麗で俊敏な嘴の餌食となる

上品ぶりやがって！
せっかく養殖した鮎をなにしやがる

「おほほほ そちは何奴じゃ」

農協が苦しい財政のなか営々と育てた鮎
献上されるが如く貴婦人の口へ

歩む姿は喝采さえ聴こえる
まあ！沢山の白鷺がきれいね
こんな処に住みたいわあ

奴に勝つ手段は抹殺するしかない
悶々とする この季節
動物愛護という厄介なしろもの

「わらわを殺めると 天罰がくだるぞよ」

純白を装う詐欺鳥
するどいのは嘴だけではない
漁師を睥睨する孔雀に似た眼光

きらきらら 水ながれ
孤高の座禅を堪能している
敵はしなやか 穂は揺れる

父が亡くなり四十九日が過ぎた
コロナウイルスの影響で納骨出来ずにいる
天津に出張の兄が、日本に帰国できないのだ。

卒寿（九十歳）も超えたのだから、
大往生であった。
ひっそりと家族葬で済ませた。

友人が生前にお見舞いしたいと言っていた。
美味しいあんパンを届けたいと言っていた。
韓日の歴史を、熱く語りたと言っていた。

ああ！ 本当に悲しい。
夜明けの祈禱で往生極楽の祈りを上げよう。
死後、親の魂は、子供の心に宿ると語る。

父母の魂が、私の心に宿っていると思うだけで
『生きている。』ということが楽しい。
ますます健康で幸せでありたい！

朧ろ影引く春の宵の口
桜花咲く情趣の雫
月影舫う光薄くして
幻花の迷夢枝先を巡る
春は曙花は桜とは

夢に見た見た花酔いの風
そぞろ歩きの心を溶かす
金と銀との光を翳し
空を飾って朧夜を架ける
夢の浮橋花の情を注ぐ

草木も眠る深夜の梢
花の明りに月の光も淡く
天まで届けと艶めく朧花
夜露に湿った色香が移る
浮世離れて樹上の祭り姿

薄光を照らす彼方を覗く
宙に輪を描く月近く
彼岸の景色夢追う世界
桜花開く楽土の扉
やがて消えゆく春の後を追う

生命は短く恋はもどかしく
咲くも咲かないも運命のままに
募^つった心は花びらの数ほどに
夜空騒めき色彩やかに
散った生命は知るや知らずや

樹肌を晒す曲った枝に
今は盛りの春の影を咲かす
昔に変わらず四季の跡を踏んで

涙色した桃色十色

浮かんで消える春の宵の口



三浦 逸雄「山羊と父がいる風景」8号（アクリル・紙）2020

史上初東西横綱による千秋楽全勝対決

世に名勝負といわれるものがあり、永く人びとの記憶に残っている。それだけ大きな感動を与えたということだろう。

相撲の歴史的な名勝負としては、栃若の千秋楽全勝対決を第一に挙げたい。これは昭和三五年（一九六〇年）の春場所、初日から一四戦土つかずの東西横綱が千秋楽で雌雄を決した一番だった。東の正横綱が春場所優勝した栃錦、西の正横綱が若乃花。ときに栃錦三五歳、若乃花が三二歳だった。東西横綱の全勝対決は史上初だった。一場所一五日制になる前は、江戸時代まで遡ればあったかもしれない。相撲の一番としてこれほどの話題を呼び、注目を浴びた一番もないだろう。それほど日本中が湧きかえって、異常な興奮状態になった。

両者立ち上がると、激しい動きがあつてから左四つがっぷりになった。相四つなのでこの体勢になることが多い。一度若乃花が東土俵一杯まで寄り立てたが、残して土俵中央で動かなくなった。数呼吸してから、栃錦が左差し手を抜いて、若乃花の右上手を切りにいった。この機を逃さず若乃花が一気に寄って白房下に寄り切った。

この大一番を迎える前の晩、気晴らしに若乃花が映画館に行くと、なんとそこに栃錦も来ていたという。だんだん目が慣れてきて、前のほうにその存在を確認した。「ほほう、先輩横綱来てるなあと思ってね。終わるとさーっと引き上げて、帰りに若いものと天ぷら屋に行って、それから宿舎に帰って寝た。勝負というものはねえ...いつもと同じように酒を飲んで寝ただけど、よく寝たなあと思っても、三時間くらいしたらパツと目が冴えてしまって、早く朝にならないかなあ、明るくならないかなあ、とそんなでしたよ」。

いっぽうの栃錦。「あの時はね、土俵に上がったら理事長（時津風理事長＝元横綱双葉山）がすぐ下で見て居たので驚いた。行司だまりに理事長が入って見ているんだから、取っている方がビックリですよ。相四つなんでね、どうしてもその形になってしまう。あのまま長引いても勝ち目はない。向こうは稽古十分なんだけれど、こちらは初場所後にパリに行ったりしているので、稽古が足りない。（当時は初場所優勝者には花の都パリに招待するという賞品が付いていた）そこで差し手を抜いて相手のまわしを切りにいった。けれどハタの者はそんなこと分からないから、なんであんなことをしたのかと言うけれど、あれは稽古の差です。あれでも精一杯やった。あの一番に負けて引退の覚悟が出来ました」。次の夏場所に栃錦は初日、二日目と敗れて、引退届を提出した。

栃若時代という一時代を築いたこの両者の対決はいつも期待に違わぬ大熱戦になって大向こうを沸かせた。しばしば水入りの大相撲となって、二番後取り直しになることもあり、死力を尽くして戦う相撲に大感激したものだ。二人とも小兵で、若乃花が一〇五キロ、栃錦一二五キロくらいだった。栃錦が幕内で活躍しはじめたころ、若乃花はずっと下に居て、早くからその存在を意識していた。「うち（二所ノ関部屋）の佐賀の花、神風、力道山といった錚々たるところがみなやられているんだ。わしと身長体重がほとんど変わらないのに、なぜあんなに強いんだろう。早

く顔合わせしてみたいなと思っていた」。

いよいよ幕の内に若乃花が上がって、取り組んだ早々から物凄い熱戦を展開した。動きが激しいばかりか、技の連続で息もつかせない、それが延々と続くのである。いっぽうの栃錦はその頃のことを後年語っている。「あんな細い脚のどこからあんな力が出るのか、土俵際まで何度も寄ってゆく、それもちゃんとした形で腰を下ろしまわしを引き付けて寄っていても、残されてしまう。よく見たんだけど、膝にゆるみがある、そのゆるみで残されてしまうことに気付いた。あの膝を伸ばさなければ勝てない、ほんとうにしぶとい膝だった」。

この二人の勝負は通算すると栃錦の方がやや上回っている。栃若時代という稀有な時代を築いたその頃を、懐かしむ声が今でも聞かれる。その後千秋楽全勝対決は、何度か実現している。大鵬対柏戸が二回あって、一勝一敗だった。千代の富士対隆の里、これは隆の里が制して新横綱の優勝に大きな花を飾った。その後では大関日馬富士が横綱白鵬との全勝対決を制して横綱昇進を決めている。

大逆転劇の意外な影武者

相撲に代わって野球の名勝負と言えば、やはりあの日本シリーズのことになる。昭和三三年（一九五八年）巨人対西鉄戦である。三年続けての対決で、昭和三一年、三二年と西鉄が巨人を征して日本一に輝いている。昭和三三年も西鉄有利の戦前の予想に反して、巨人が三連勝と西鉄を追い詰めた。頼りのエース稲尾を巨人打線が打ち込んで、一、二戦ともワンサイドゲームで大勝した。場所を平和台に移した第三戦は稲尾が立ち直り、巨人打線を封じたものの、ライト大下の拙守もあって一対ゼロで巨人が三連勝と西鉄を追い込み、ついに崖っぷちに立たされた。

ここから先はこれまで幾度も報道されていて、野球ファンなら周知のことなので繰り返さない。稲尾の連投、平和台での第五戦の一〇回裏、稲尾のサヨナラホームランなど劇的な大逆転劇だった。この立役者はなんといっても稲尾であろう。彼の活躍には思いも寄らぬ影武者が居た。このシリーズの第二戦は後樂園でのゲーム、これが早々と巨人に傾き、折しも上天気で暖かく、眠気を催すような試合展開ではあった。午後の日差しが三塁側西鉄ベンチに差し込み、全体にだらけたような選手たちの動きが見えた。そこへ妙に太った選手がゆっくり出てきて、誰かが手伝ってプロテクターを付けていた。やがてミットとマスクを持ってホームベースに向かって歩いていった。とても緊張に満ちた日本シリーズの雰囲気とは遠い、もっさりデブが出て来たという感じだった。これぞこのシリーズの行方を左右する稲尾のピッチングを立ち直らせたキャッチャー日比野の登場だった。

第一戦、第二戦とも巨人打線に打ち込まれて、いいところが見られない稲尾のピッチングが、日比野がマスクをかぶった途端、急に立ち直りほとんど完璧な投球を見せるのである。日比野のリードが優れていたと誰しも思った。巨人打線の中心は、この年のゴールデンルーキーといわれた長嶋だった。開幕第一線の一回表、先発の稲尾がランナー二人を背負って長嶋を迎えた。打者と投手が相対する場合、お互い相手を睨み、構えをもち、この段階から闘いが始まっている。ぐっと押される場合もあれば押す場合もある。このときの長嶋はそうした構えが一切なく、ただボーっと立っていたと稲尾が回想する。これは打つ気がないなと思ってストライクを投げこ

むと、鋭い当たりのファウルを打った。何か変だと思いつつ追い込んでから、外角低めいっぱい自信のスライダーを投げると、それをもの見事にライト戦に三塁打を放った。ここが稲尾攻略の皮きりとなって、稲尾はなす術もなく大量点を奪われる。

長嶋はのちに語っている。「好球必打が身上なのだ。外角に来たので逆らわずにライト線に打った。相手投手の投げる球を読むといった姑息な手段はとらないでやってきた。常に来た球に逆らわずに打つことを心掛けてきた。」来た球を本能のままに打つというのが長嶋流なのだろう。野村監督のように「読み」などという姑息なことはやらないというわけだ。これが最後まで通用したところに、長嶋の天才ぶりがある。この打ち方をする選手は少なくない。初めは皆そうだ。ところがこれでやってゆくうちにピッチャーにその欠点を覚えられて打てなくなるということが多い。そこで読みを活用して対処してゆくことになる。それを「姑息」といい切れたところに、長嶋の真骨頂がある。

さて日比野がマスクをかぶって以後巨人打線は鳴りを潜め、まったく打てなくなってしまう。これは日比野の好リードが光ると誰しも思った。ところが後年稲尾が語っている。

「あの長嶋をどうして抑えるかがカギだった。長嶋はこちらが何を投げるかとか、何処を責めてくるかといったことを考えていない、ただ来る球に反応してバットを出してくる、と気付いた。その対策として浮かんだのは、こちら何も考えずに相手の形からその逆を突いて打ち取ろうと思った。長嶋は投球動作にはいると、肩が微妙に動いて、肩が開いたり、入ったりする。そこで肩が開くときは、外角へスライダーを投げる、入ってきたら内角へシュートを投げる。これが功を奏して長嶋を抑え込むことが出来た。この場合若い和田捕手だとサインを交換して、投げる球を決めておかないと捕れない。しかしベテランの日比野さんはなんでも捕ってくれた。振りかぶってから投げる球を決めるので、同じ握りからシュートでもスライダーでも投げられるように工夫した」。

こんなピッチングが出来た稲尾投手は、すごい天才に違いない。大投手の金田も振りかぶってから外したり、真ん中へ投げ込むことがあったという。江夏も似たようなことをやっている。天才たちだけが大会に見せる天才的ピッチングだったのだ。

この昭和三三年から五年後の昭和三八年に、西鉄は久しぶりに巨人と日本シリーズで対戦した。このとき長嶋は中心バッターとしてますます実力を発揮しており、王が一本足打法によっていかに強打者ぶりを発揮していた。ここで稲尾は四試合に登板して、王を内野安打一本に抑え込んでいる。王対策をすでにシリーズ前に考えていたのだ。稲尾は巨人打線を研究し、一番から九番まで対策を決めることが出来た。しかし王だけはその欠点が見つからず、なかなか抑える方法が分からなかった。しかし何度も繰り返し映像を見ているうちに、王が片足を挙げるときピッチャーの足元を見ていることに気付いた。ここから対策を編み出して、当たり損ねの内野安打一本に抑えたのである。王・長嶋を抑え込んだのは稲尾ならではというべきであろう。

名勝負というものは、それ自体でじゅうぶんに面白く見応えのあるものだ。しかしこうしてその当事者が後年になって、そのときのことを語ってくるとまた一段と面白さが深まってくる。このほかにもいろいろあるけれど、若原の全勝対決、そして巨人西鉄の日本シリーズ大逆転劇という、名勝負の中の名勝負を振り返ってみた。（了）

冬山訓練を経てアルパインクライマーを目指すと思いきや、私は雪のない岩のみを登るフリークライマーへの道に向かっていた。

ある日、神奈川県登山訓練所で知り合った山岳会の方から「東京にあるクライミングジムに行ってみないか？」とのお誘いを受けた。埼玉にあるクライミングジムには何度か行ったことがあったが、東京のクライミングジムはこの時が初めてだった。そのジムは都営新宿線の菊川駅にあった。元々はベビーカーを製造販売している会社の東京支店で、その支店長がクライマーだったため、倉庫部分を改造してクライミングジムとして営業していたのだ。ジムの名前は「ウイング」、アルパインとフリーのクライミングをこなす支店長の名は加藤さん。この加藤さんがとてもアクの強い人で、独特のノリで人望を集めることができる一方、「それを言っちゃあ、おしまいでしょ」の発言を連発して秘かな敵を作ってしまうという一面も持っていた。

その年の夏、加藤さんから「お盆に山梨県の瑞牆山でキャンプしながらクライミングするけど、高島さんも来る？」という話が出た。面白そうなので神奈川の山岳会のメンバーと行くことにし、お盆の初日の夜、その方の車で瑞牆山へと向かった。中央道を須玉インターで降り、一般道を北上していく。民家もまばらとなり、鬱蒼とした林の間を抜けて行くと、目的地はもうすぐそこだ。外灯など全くない道を、車のライトをハイビームにして進んでいく。するとそのライトの先に、おしりを丸出しにして蹲っている中年男が浮かびあがった。いきなりライトを浴びたその男はこちらに虚ろな視線を向けた。私たちは「なんなの、あの男！ おかしいんじゃないの？」と笑い転げた。

迷いながら加藤さんたちがテントを張っている場所になんとか到着。当時の瑞牆山はまだキャンプ場もそれほど整備されておらず、キャンプというより〈野営〉といった様相で、加藤さんはブルーシートを木の枝に括りつけて屋根にして、その下に薄汚れたマットレスを敷いて横たわっていた。というより臥せっていた。周りの仲間たちにわけを聞くと、私たちが到着する前に夕食用にと森に自生しているきのこを採り、鍋にして食したのだという。毒きのこだったのだ。ほとんどの人が怖がって手をつけなかったから大事には至らなかったが、加藤さんのほかにもう一人、その鍋に手をつけた人物がいた。それが先ほどのおしり丸出し男、加藤さんの親友〈梅ちゃん〉であった。長野県在住の梅ちゃんにはその後、ウイングのクライミング合宿でお宅に泊めていただいたりなど、とてもお世話になることとなった。

私はといえば、もちろん一升瓶持参である。「二、三日寝てれば治るからよ」と話す加藤さんに関わることなく、呑んだ、呑んだ。小用を足したくなり、ヘッドランプを頭につけて、林道の向かい側にある繁みに行こうとした瞬間、足もとの石に躓いて顔から倒れ込んだ。「高島さんが蛍のようにゆらめいて消えた」と言われた私はその後、約一ヶ月ほど頬に傷持つ女となった。翌日、ちゃんとクライミングをしたのかは覚えていない。

関東近県のフリークライミングのゲレンデは人知れず存在しているが、季節によって最適なゲレンデは変わっていく。日本では春と秋がクライミングの最適期で、奥多摩あたりの山や秩父の双

子山に通ったりしたものだ。夏場はそれらの山の岩からは水が浸み出してきたりと、登ることが困難になるため、もっと北にある瑞牆山や長野県の小川山が最適地となる。冬も多くのゲレンデが寒すぎて向かなくなるために、伊豆高原の断崖絶壁が唯一の冬場のゲレンデとなっていた。

翌年の夏も加藤さんに誘われて、今度は瑞牆山の先にある小川山へと向かった。小川山の麓は大きなオートキャンプ場となっていて、クライマー以外にも多くのキャンパーが訪れていた。繁忙期の夏休みともなると、車を止めるところを探すのも難しいくらいの混みようだ。中央道も日中は激しい渋滞となるので、夜の七時くらいに東京を出発して三時間、十時くらいに小川山に入るという方法を取っていた。加藤さんは相変わらずの野営スタイル、私は一人用のテントを張って就寝、朝を迎えた。遠景する岩場には、すでに壁に取りついているクライマーの姿が見える。私は「なあ高島さん、この小川山をクライミングのゲレンデとして開拓したのは、このオレなんだぜっ！」と豪語する加藤さんに連れられて、登る人も少ないマニアックなルートを巡っていた。

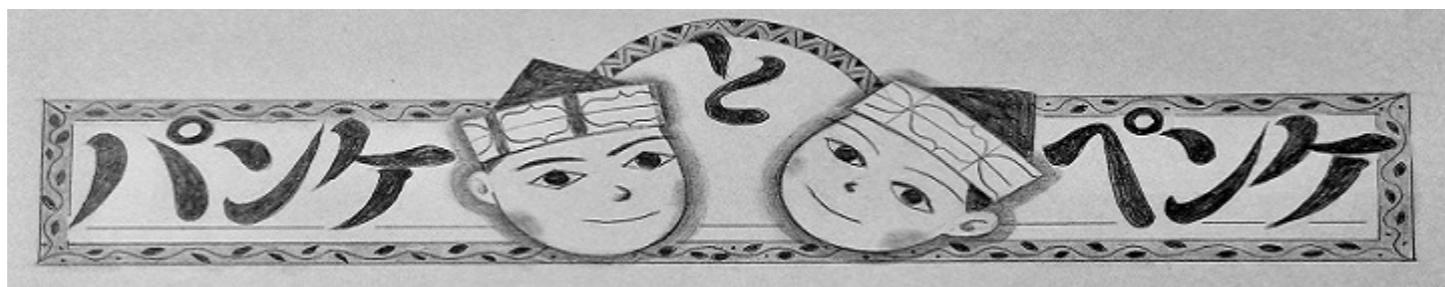
夕方に近づき、「じゃあ、今日はこのルートを登って終わりとするか。高島さんみたいな初心者向きのクラックだからよっ」と言って加藤さんが指さした先には、一本の割れ目が岩と岩の間を上へと向かい走っていた。

加藤さんは腰に巻いたハーネスに安全確保用のカムという器具をぶら下げ、スイスイと登って行ってしまった。「ほお～なるほど簡単そうね」と思った私が甘かった。登り切って、降りてきた加藤さんが「じゃ、次は高島さんね。ただ登ればいいだけの状態にしてきたから」とハーネスに結んであったロープを解き、私に手渡した。クラックを登る際には通常、掌にテーピングを巻いて手の甲を保護してから、掌や足先を岩の割れ目に突っ込んで摩擦を作って登っていくのだが、加藤さんが余りにも呆気なく登っていたのを見ていた私は当然、テーピングをすることなく素手で登り始めた。小川山の岩は花崗岩である。粒子が粗い。抵抗が強いのはいいのだが、自分の身長くらいまで登ると手の甲が赤くなってきた。我慢しながらルートの半分まで登ると、手の甲はもう血だらけである。「すみませえーん、ちょっとぶら下がって休んでもいいですか？」と下にいる加藤さんに声をかけると「バカ言ってんじゃねーよ、下手に休んだら死ぬこともあるって考えながら登れよっ！」という罵声が返ってきた。仕方なく私はなんとか上まで登ろうとしたのだが、体が全面拒否をして動くに動けずの状態に陥ってしまった。ずっと〈肉体は精神の従者に過ぎない〉と考えてきた私は、心底驚いた。肉体がこんなにも自立性を持っているなんて！

ショックだった。

やがて雨が振りはじめた。夕立だ。

私は壁にぶら下がったまま雨に打たれ、そして泣いた。（続く）



パンケとペンケ (十九)

おじさん、おじさんというパンケちゃんの声が聞こえる。

何時だろうと時計を見るとまだ5時だ。

「早いねえ」と言うと「おじさん大変だよ。トーヤの向こうの山の上からね、黒い煙が出ているんだ。かなりいっぱい」

「えっ、火山が噴火するんじゃない」と、あわてて起きあがった。

3人で丘の上に行き遠くから山を見た。たしかにふだんと違うかなりの煙だ。たくさんの煙が空をおおっている。

するとハリガネムシの神様の声が聞こえた。

「これはイカン。この煙はあきらかに噴火の予兆じゃ。100年ぶりかのお。困ったことになった」

「困ったことって？」と聞くと「キキンになる」とまゆにシワを寄せる。

「来る日も来る日も灰が降ってな。太陽がかくれ草花も作物も育たず、夏でも寒くなるのじゃ。山の生き物も食べ物がなくなり里に来て荒らす。頼みのチェプも溶岩で川がやられるとのぼって来れなくなる」

あの煙、青虫に似てるね・・・パンケちゃんだけはのんきなことを言っている。



パンケとペンケ (二十)

夏がすぎ、ペンケちゃんがめでたく14歳の秋を迎えたある日。

朝早くペンケちゃんに起こされた。

「おじさん起きて。ウサル川とペンケ川のぶつかるところあるでしょ」

「ああ、パンケちゃん、ペンケちゃんが会うところだね」

「そこでね、ペンケの里の人たちがチェプをいっぱいとっているの」

「いっぱいって？」

するとパンケちゃんが「枯れたイタドリでね、堰を作ってチェプを棒でたたいたりして大きなカゴにいっぱい、次から次へとペンケの里の方に運んでいるんだよ」

「何だって、じゃあいつか酋長さんのチセで話していたことって本当だったんじゃないか」

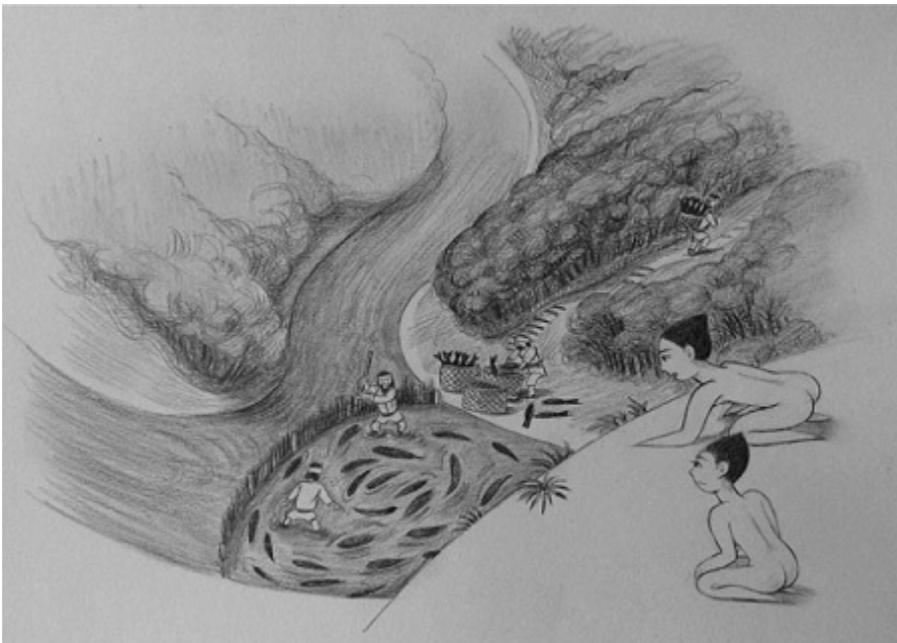
そう、あの人たちよ。夕べ遅くにこっそり里を出ていったの見たわ」

ペンケちゃんはちょっとオロオロしている。

「やっぱり酋長さん、いいくるめられちゃったんだね」とパンケちゃん。

パンケちゃんは「ああ、これじゃパンケの里の人たちの分がなくなっちゃうよ。知らせなくっちゃ」とパンケの里に戻ろうとしている。

大変だ。そんなひどいことが知れたらペンケの里の酋長さんもだまっていないぞ。



第六章 対象の固有の力について

あらゆる国に敬虔な信奉者が必ずいますけれども、言われている以上に奥深いが余り読まれていない哲学者であるオーギュスト・コントの箴言について、これから熟考するのは丁度良い時です。「外部に基づいて内部を規制すること」この言葉は辛い経験と力強い魂の動揺によって一度ならず体験した人間のものです。探究的な感覚の疲労によって少なくとも人体の動きに基づいて自らを規制することに迫込む人間の言葉でもあります。何故なら、堅固なこの世界が至る所から私たちを捕らえていると考えるのは不十分であるからです。自然の思想をまさに世界そのもので規制しなければなりません。ご存知の様に、星々そのものは長い間、愛、希望、恐れが委ねられていました。その様な対象と結び付いたこれらの力は、公平なそれらの秩序が先ず感受される限りでないと、複合された感情の平静さが齎されることはありません。より身近な事物の秩序は既により隠されていて、取分け事物を見る機会を屢々見出さない見物人にとっては、拡散して一貫性のない夢想を追い掛けるしかなく無意識な話の悪循環の中で消えて仕舞います。それ故に、詩人や画家から受ける長い訓練がないと、宇宙の眺めが通常の退屈の原因になる不毛の興奮から私たちを解放するのは滅多にないこととなります。

手仕事は何かの薬になります。というのも、私たちの行動は堅固な秩序に出会い、それを出現させるものでさえあるからです。放って置かれた自然よりも耕された畑の方に多くの秩序があり、目に付き易いものです。しかし又、畑では原因の多様性が限度の無い希望とか形にならない恐怖に導きます。陶工とか指物師とか石工という職人は、対象をより良く限定して現し、虚構を終わりにすることが出来ます。その意味において完成して永続性のある作品には何らかの美学的なものがあり、職人の如何なる仕事にも芸術家の何らかの幸運があります。それと同様に気付かねばならないことは、この休息と精神への確信が忠実で不変の形を再び見出しながら、仕事と抵抗の全てのしるしによって強くなることです。その意味において石や堅い材木や鉄における道具の痕跡は既に一つの飾りであり、美のしるしの一つとして常に目が再発見するのは、変化に対する対象の力がその磨滅や永続性のある事物の破片においてさえも既に表明しているものです。それに反して少しも目立たない柔軟な材質のしるしそのものは、すり減る代わりに折れて仕舞い、最良の規範を手に入れる時、それらの飾りの効果を何時も破壊します。仕事と手段の長い回り道が十分に準備された時、秩序立てられた自然に関する熟考が詩的リズムによって自らを長く支えなければならなかったこと、そのリズムが側面でより一層精力的に一つの方法によって数々の言葉を定めて戯言を全て終わりにするのに協力したことは注目すべきことです。力強い精神にとって、少なくとも偏見によって精神を定めて野生の神々を追払う知識の進歩と普及という結果により、何故自然が都合の良い状況の中でしか本当に美しくないのか、恐らく既にお分かりのことと思います。

事物が人間の欲望に譲らないので苛立つのは、思想が幼くて子供っぽい時なのです。経験が素早く認識させてくれるのは、思想が曖昧であることは厳しい必然性による試行よりもっと大き

な悪であり、その必然性に対して意志は自ら強くなり、自らの支えそのものをそこに発見します。私を愛することも憎むこともなく、決して騙すこともないこの堅固な障害によって私は思考し始めます。以上は熟考による幸福でもあります。

ところで、軽くても重くても全ての芸術作品には優れて対象になるという性格があります。その外観は如何なる曖昧さもなく、理解可能な如何なる変化もありません。要するに作品そのもので納得するものであり、私はしっかりと必然として基礎が安定しているのを理解します。それは事物である作品にとっては極めて明白ですが、取分け建築にとっては装飾と彫像と絵画を大変良く支えています。しかし詩と音楽と簡単な物語においてさえも、厳格に細部まで尊重されているに違いない形式がありさえすれば、堅固な秩序と限定も又あります。宗教のあの繰返しはそれだけで何らかの美的なものがありますし、子供たちもそのことを良く知っています。恐らく鳥の鳴き声がそれだけでは決して美学的性格がないのは、厳格な限定と規則正しい繰返しに欠いているからです。春の力の偉大な働きを熟考する人によってそれが結び付くなら、対象の価値を与えること以外に美学的なものにならないのです。

それ故に芸術作品は限定されて堅固に作られなければなりません。そして、それはこれからお分かりになる様に、細部にまで及びますが、大衆に身を置かないと飾ることも出来ないからです。それ故に規則のない即興は決して美しくありません。自分の演説全体に簡潔な物語を定めるのに成功するのは雄弁家の技術です。如何なる概念も作品ではないと言って置きましょう。そして単なる可能性の間で最も美しいものはどんなものであろうかを探究することは時間の浪費であると、どんな芸術家にも忠告して置きたいと思います。というのも、如何なる可能性も美しくないからです。現実のものだけが美です。それ故に作ってから、その次に判断して下さい。以上は、どんな芸術においても第一の条件になりますし、芸術家 (artiste) や職人 (artisan) という言葉の類似がそのことを良く理解させてくれるのも同じです。しかし想像力に従う、現実の対象のないどんな熟考も必然的に実を結びません。君の作品を思考しなさい。そうです、勿論です。しかし人は在るものしか思考しません。それ故に君の作品を創りなさい。(完)

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

高 裕香（こうゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。葉の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

さとう のりお

一九五〇年、新潟県生まれ。高校卒業後、絵の道に進みたく、反骨、反権力、ユニセックスの雄・長沢節主宰の「セツ・モードセミナー」に通う。四年で卒業後、五年間位エセヒッピー的なぐうたらではあるが、充実した生活を送り、色々あった後、印刷会「待望社」に入社。仕事を通じて、日本詩人クラブ理事長も務めた笈楨二氏と知り合い、彼が発行する動物に関する小冊子に短いエッセイを書くようになる。笈氏亡き後の二〇〇九年より、詩誌「山脈」のメンバーとなり、詩を書くようになる。尊敬する詩人は、笈楨二、ジョン・レノン、村上昭夫。日本詩人クラブ会員。

宿谷 志郎（しゆくやしろう）

一九四七年東京都青梅市に生まれる。一九七〇年群馬県高崎市に転居。名曲喫茶「あすなる」（催華国氏経営）を経てデザイン事務所に勤務。群馬交響楽団のPRを担当し演奏会のポスターなどをデザインする。一九七七年広告代理店を設立し医薬品、検査機器の広告をはじめ編集、イベントなどを手がける。トヨタ財団助成の「シビックトラストフォーラム」に参加。まちづくりのための資金づくりについて学ぶ。自治体学会創設に市民の立場で参加。一九八七年東京・青山に編集プロダクションを設立し主に書籍の制作。高村昌憲氏の「パープル」に関わり、一九九九年「風狂の会」に参加。大分県経済誌「アド経」に一年間エッセイを連載。明星大学教授・清宮義博氏の『花々の花粉の形態』などを出版。二〇一二年廃業。一年半の休養後、革工芸（革絵）を始める。二〇一七年より北海道に半年の移住を繰り返し専念。趣味はフルーツ。よく聴く音楽はバッハ、モーツァルトの作品。

神宮 清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「蒨」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんで来て、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高島 りみこ（たかしまりみこ）

一九六〇年高知県生まれ、東京都中野区在住。

日本詩人クラブ、日本現代詩人会会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年 待望社 第32回福田正夫賞）

装幀家（高島鯉水子）

究極の趣味はキックボクシング（アマチュア）！最近は試合に出ていないが...

高村 昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロボ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年からパプーの電子書籍に、随想集『アランと共に』（全3巻）及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロボ』（全5巻）『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

長尾 雅樹（ながおまさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

樺自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつぐら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロボリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうらいつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう) 第68号

2020年3月19日発行

<http://p.booklog.jp/book/130135>

編集：風狂の会（担当：高村昌憲）

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/130135>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社